



ストリング・ゼム・アロング

文=ジョージ・カックル

第7回

情緒に満ちた、電話絡みの歌

今回は電話にちなんだ曲を紹介しよう。しかも携帯電話ではなく、いわゆる昔の電話。今では情緒さえ感じさせる、電話が登場するロックの曲ばかりだ。

ちなみに俺のアメリカでの電話にまつわる印象的な記憶といえば、67年の頃のこと。ロサンゼルス郊外で見た電話が忘れられない。ある牧場の壁に取り付けられた電話には、ダイヤルがなくて驚かされた。かける方法はふたつあって、一つは受話器をとってオペレーターに電話番号を伝える方法。もう一つは受話器を取ったら、電話番号の数だけボタンをガチャガチャ押す方法。よく間違えないなと感心したものだ。

まずは電話の歴史を感じさせる曲、キングスの「パーティー・ライン」だ。これは66年の「Face To Face」の1曲目。パーティー・ラインとは、イギリスやアメリカに昔あった電話システムで、複数の人間同士の間で電話が目的ではなく、電話回線が少なかったため複数の家が同じ電話線を共有するというものだ。電話をかける人は受話器を上げて、他人が会話していないか確認してから使う。もし誰かが話していたら、その人が電話を切るまで使えない。逆に言



Kinks "Face To Face" Pye [UK] ●NPL18149 [1966] Sanctuary [UK] ©2772620 incl. 'Party Line'

えば、誰かに会話を聞かれる可能性がある、困ったシステムなんだ。カリフォルニアの山中では、今でもこれが残っているらしい。レイ・デイヴィスは、この方式をネタに彼らしい皮肉がこもった歌詞を書いている。「I'm on a party line, wonderin' all the time」はパーティー・ラインを使うとや、いつも考えすぎる。「Who's on the other end? Is she big, is she small? Is she a she at all?」受話器の向こうは誰なんだろう？ 彼女は大柄なのか、小柄なのか。待てよ、本当に女なんだろうか。想像を巡らす彼にとって、電話が自由に使えないことも、プライベートがなくなることも、実はたいした問題じゃない。

セカンド・ヴァースでは、直通回線が欲しい、僕が引越してきた時にはもうこのパーティー・ラインがあつたけど、なんとかしてくれないと次の選挙には投票しない

よ、と不満を述べる。でも、そのすぐ後で彼がいつも盗み聞きをしている女性が誰なのかを調べてくれ、なんて言っている。これは、女性がどこの誰なのか教えてくれないと投票しない、という意味でもあるんだ。サード・ヴァースはこう始まる。「I can't speak without an interception」会話の最中、必ずといっていいほど邪魔が入る…。パーティー・ラインで通話中、第三者が受話器を取ると、カチツという音が鳴る。ここでの「interception」とは、そのことだ。その第三者が受話器を置く音が聞こえてこなければ、通話がそのまま聞かれていることになる。だから「This is private, please get off my line」これは私的な会話なんだ、僕の回線から出ていってくれ、という歌詞になる。その後で、八教えてくれ、いつまで邪魔されなくちゃならないんだ」と不満を述べるが、その邪魔をする相手は、実は彼が会話を盗み聞きしている女性なんだ。だから、「I'd like to meet the girl who's always talking」いつも話している彼女に会いた、と彼は語る。パーティー・ラインの不便に憤りつつも、電話線で自分とつながり自身の妄想をかき立てる未知の女性に会いたくて仕



Jim Croce "You Don't Mess Around With Jim" ABC [US] ●ABCX756 [1972] Edsel [UK] ©EDSD2116 incl. 'Operator (That's Not The Way It Feels)'

方がない主人公の複雑な気持ち、実にうまく表現された歌詞だと思ふ。 ● 今や数少ない、電話交換手をタイトルにした曲を二つほど挙げてみよう。まずはジム・クロウチの「オペレーター」。

これは親友に彼女を取られた男の切ない物語。72年発売の『ジムに手を出すな (You Don't Mess Around With Jim)』のセカンド・シングルだ。アルバムは1位を記録して、93週もチャート内にとどまった。

この曲の主人公は、昔の彼女の電話番号を調べようとしている。ファースト・ヴァースでは、彼女に電話するために電話交換手に話しかけ、助けを求めている。僕が持っている電話番号は紙マツチに書いてあるんだけど、古くなって文字が薄くなり読めなくなっているんだ。彼女は今、僕の親友だったレイと一緒にLAに住んでいる…。

コーラス部分は、△こういうことよくあるよね。でも、そんなことは忘れよう。ただ、電話番号が分かるなら教えてくれない？ そしたら電話して、僕は大丈夫だよと伝えたい」と始まる。そして、「And to show I've overcome the blow, I've learned to take it well」僕はもう乗り越えた、受け入れられるようになったことを示したいんだ、と続く。ところが、実は彼はまだ自分の気持ちが整理できていない。彼女との愛が本物じゃなかったと自分を納得させられたらいいと思っではいるのだが、まだそこには至っていないという。 ここでセカンド・ヴァース。交換手さん、いま教えてくれた番号にかけてくれる？ 目に何かが入っていて、教えてくれた番号が読めない。毎回こうなるんだ。僕を救ってくれないはずの愛のことを考えると…。涙で目が曇っているのだろう。 サード・ヴァースでは、交換手さん、この電話のことは忘れてくれる？ どうせ、そこには本当に話したい人はいない。時間を割いてくれてありがとう。あなたは本当に優しくかった…。こうして、彼は彼女への電話を諦める。そして、「you can keep the line」10セント (dime) は取って



Sugarloaf / Jerry Corbetta
"Don't Call Us, We'll Call You"
Claridge [US] ●CL1000
[1975]

incl. 'Don't Call Us, We'll Call You'

ダーで作曲者のジェリー・コルベッタは、79年にフォー・シーズンズに参加する。
"Don't call us, we'll call you" = 電話番号を置いてくれれば後で電話してあげるよ。これは、誰かが何かを売り込みに来た際、体よく追っ払うときによく使う。この曲は、バンドのメンバーがレコード会社に電話して作品を売り込む場面から始まる。でも、相手されない。歌詞の最初に "Long distance directory assistance, area code 212" とあるが、これは長距離電話の案内で、エリア・コード (市外局番) の212は、NYのマンハッタンだ (歌が始まる前に、メロディーに乗って出てくるダイアル・トーンは、シュガーローフとの契約を断ったCBSレコードの内密の電話番号だそう)。レコード会社のA&R (アーティスト&レパートリー=制作ディレクター) と電話が繋がったが、保留にされたあと

"Don't call us, we'll call you" と言われる。僕はあなたと仕事していたと言っている友達から電話番号をもらったんだけど、(ステレオ92 (ラジオ局の名前) のオール・ナイトDJ。覚えていないかい?) (この声はウルフマンジャックの真似。ここに出てくるラジオ局名は、その曲が流れるラジオ局によって、名前を入れ替えるのが定番だった)。テープを送ったけど、僕らのやりたいことが分かってもらえた? 僕らは裸でもライブをやるよ...と売り込むが、レコード会社の人間は、なんか聴いたことがある、ジョン、ポール、ジョージに似ているねと答える。ここでビートルズ「アイ・フィール・フライン」のギター・リフが流れるのはジョークだ。
次のヴァースでは、バンドのメンバーがリスナーに話しかけている。とりあえず僕は、レコード会社のヤツが使えないと言った曲でヒットを出して、ちよつとツアーをした。すると今度はレコード会社から電話がくるようになった。そこで僕は、印税 (percentage points) もあるし、安いマリファナも、使えないほどのグリッター (glitter) もあるんだから、もう電話するなよ、こつちから電話するよとレコード会

おいてくれ、という歌詞で曲は終わる。このフレーズは "You can keep the change" と同じ感じで、例えばウェイトレスがいいサーヴィスをしてくれたら、おつりはいらないうと云うことと同じ。公衆電話では、交換手と話すときはお金が戻ってくるからね。曲の主人公の、電話交換手に対する感謝の念が表わされている。苦しんでいるとき話せる人間がいるだけで人は救われることを、ジムは言いたかったのだと思う。

次は、グレイトフル・デッドが70年に発売した『アメリカン・ビューティ』に収録されている「オペレイター」。キーボーディスト・ロン・ビッグペン・マカーネン作曲のブルースで、曲の主人公 (恐らくビッグペン) が、いなくなってしまう彼女を捜す話。ジムの同名曲と同じように、電話交換手に助けを求めるが、彼女に未練があるのではなく、ただ、達者になっているのかと案じている心境が歌われている。

主人公が、交換手に彼女の局番と電話番号を訊ねる。"My rider left upon the Midnight Flyer. Singing like a summer breeze" = 僕の彼女は、夏の風みたいに歌いながら寝台列車で去って行った。彼女 =



Grateful Dead
"American Beauty"
Warner Bros. [US] ●WS1893
[1970] ▶ライノ (ワーナー)
©WPCR15141

incl. 'Operator'

"Operator" と表現しているのは、昔、その女性をバイクの後ろに乗せてたからだろう。続いて、彼女はきつと南に行っている、たぶんバントンルージュのあたりだろう、と歌う。あんなによく電話をかけたのに、番号を覚えてない。電話番号案内では分からなかった。"Central done forgot it" = 本社にもその記録はない...。この "central" とは、電話会社の本社。昔はここに電話して回線をつなげてもらっていたからね。

続いて主人公は、個人情報だから電話番号は教えられないと交換手から言われる。テキサスは洪水で、ユタ州では電信柱が機能していない。だからどうにかしてプライヴェートの電話を見つけないんだ...。

最後のヴァースでは、彼女がいま何をしているのか想像する。鉄鋼工場にいるのかもしれない。△ハウス・オブ・ブルーライツ▽で働いているのかもしれない。この

"House Of Blue Lights" は、きつと40年代にシカゴのパーシング・ホテルにあったアフター・アワーズ・クラブだろう。これは遅くまで違法営業しているクラブのことで、彼女が水商売をしているかもしれないと案じている。もしくは、何か悪いことをしてポートランドからバスに乗って逃げていくかもしれない...。次に "I don't know where she's going. I don't care where she's been" = 彼女がどこに行こうが僕には関係ない、どこにいたのかも関係ない、と歌う。これは、何をやっていてもいいというダブル・ミーニングでもある。最後は、"Long as she's been doing it right" = ただ正しく生きてくれればいいんだ、という歌詞で締めくくられる。

次はアメリカでよく使われる言い回しをタイトルにした、ユーモアたっぷり曲。シュガーローフの「ドント・コール・アス、ウィール・コール・ユー」だ。74年にシングル発売、チャートの9位に。その後、73年に出していた『アイ・ガット・ア・ソング』にこの曲を入れ、タイトルも同名に替えて再リリースしたが、残念ながらチャートでは152位止まりだった。ちなみに、リー



The Marvellettes
"Playboy"
Tamla [US] ●TM231 [1962]
▶モータウン (ユニバーサル)
©UICY75842

incl. 'Beechwood 4-5789'

社のヤツに言い返してやった、とね (笑)。

最後に、今は使われていない電話番号の覚え方を、マウエレット「恋のビーチウッド (Beechwood 4-5789)」で紹介しよう。アメリカの電話のダイヤルには、番号だけでなくアルファベットも記されている。例えば2にはABC、3にはDEF。それで、英単語を使い (最初の二文字を数字にする) 電話番号を覚えやすくする。"Beechwood" は "93"。だから "Beechwood 4-5789" は "934-5789" だ。例えば "Franklin" は "37" で、使う単語は決まっている。曲の内容は、△ベイビー、これが私の電話番号よ▽と云っているだけなんだけどね (笑)。
昔の電話機は今よりパッションを出せたような気がする。最近では怒っても受話器をガチャンと切れず、タッチ・スクリーンをすくつと横に指でこするだけだからね。☎